

シナイ通信

第14号

平成21年3月31日

NPO 法人 シナイモツゴ郷の会

TEL / FAX (0229-56-2150)

MAIL shinaimotsugo284@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚

字小谷地 504-1 鹿島台公民館内



田園の魚をとりにどせ

シンポ開催と出版で自然再生モデルを提案

実践進むシナイモツゴ郷の米認証制度：保護⇨郷の米認証⇨販売支援

シナイモツゴ郷の米の認証制度を初めとする水辺の自然再生の活動事例が、10月開催のフォーラム、11月東京開催のシンポジウムそして1月刊行の新刊本「田園の魚をとりにどせ」により全国へ発信されました。

消費者が認めたシナイモツゴ郷の米認証制度

ついにシナイモツゴ郷の米の販売が、2008年10月に開始されました。かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会は昨夏から新聞チラシ、HP、小売店への協力要請など精力的な宣伝活動を展開しました。この結果、当会が認証したシナイモツゴ郷の米3トンを小売店などで完売し、08年度の活動を終わりました。彼らは、今後はシナイモツゴが息づく池を増やしながらか、郷の米の作付面積を増やしたいと意欲満々です。づくり手の会とご協力いただいた地域の皆様、本当にご苦労様でした。

地域ぐるみで田園自然再生

2002年に始まった住民による池干しブラックバス駆除、2004年から受け継がれている里親小学校によるシナイモツゴ人工繁殖と稚魚放流、2008年のシナイモツゴ郷の米認証制度と販売開始により、地域ぐるみの田園自然再生が鹿島台で始動しました。

「自然再生米づくりフォーラム」鹿島台開催

連携深める自然再生米生産団体

田園自然再生を担う農業者を支援する目的で、10月11日鹿島台の鎌田記念ホールで開催しました。全国で最も先進的なコウノトリの郷米（兵庫県豊岡市）と大崎市のふゆみずたんぼ米（田尻地区）、ゆきむすび（鳴子地区）、シナイモツゴ郷の米（鹿島台地区）の指導者を招き、地元住民が参加して活発な議論が展開されました。総合討論で、大崎市の自然再生米を生

産する3団体が、最も先駆的なコウノトリの郷米を参考にしながら、連携して取り組むことになりました。

魚類復元シンポジウム東京開催

「田園の魚をとりにどせ」1月刊行、早くも2月増刷

田園の魚類復元シンポジウムを11月29日立教大学池袋キャンパスで開催しました。全国から多くの自然再生活動団体から150名以上が参加し、白熱した議論となりました。特に、どのように活動を継続するかが議論されたことは画期的です。

また、09年1月30日には、これまでのシンポジウムの内容を集約した「田園の魚をとりにどせ」を刊行しました。田園の魚類復元をテーマにした初めての本であることから、予想以上の反響で、2月20日に増刷となりました。



東京の書店で特別なディスプレイの新刊本

魚類復元による田園の自然再生 共同シンポ 立教大学 池袋キャンパス

2004年以來、毎年、秋に大崎市などで水辺の自然再生シンポジウムを開催してきました。参加者からの強い要望を受け、今回、立教大学濁川教授の協力を得て東京開催が実現しました。11月29日、立教大学池袋キャンパスの会場には全国の市民団体や行政機関から150名以上が参加しました。各講師が新知見と提言を語り、パネルディスカッションでは熱い議論が展開されました。特にディスカッションでは小林座長の重要課題に焦点を当てた進行により、短時間にもかかわらず問題点が抽出され今後の方向性が示されました。この内容は単行本「田園の自然をとりもどせ」(恒星社厚生閣)として1月30日に刊行され、水辺の自然再生に取り組む多くの方々に活用されています。



受付 & 展示コーナー

(1) 基調講演： 保全・復元すべき課題

細谷 和海 近畿大学

田園生態系はほ場整備によりでんぷん工場に化した。早急に復元方を検討する必要がある。

水谷 正一 宇都宮大学

水田・水路のネットワークがほとんど機能していない。改善するための具体的方策を研究し提案したい。

高橋 清孝 NPO 法人シナイモツゴ郷の会

自然再生活動は全国津々浦々で展開する必要がある。市民や農家が利用できる簡単な技術と継続可能な体制作りが重要である。

(2) 自然再生活動における問題点、解決方策

藤本 泰文

宮城県伊豆

沼・内沼環境

保全財団

ゼニタナ

ゴの生息池

は全国で13

か所しかない。

今もブラック

バスなどの脅威に

さらされており、保護・保全するには地域住民の理解を得ることが大切だ。

山野ひとみ NPO ニッパ ヲラコ 高安研究会

ため池は希少魚の生息場所として重要であり、池干しなどにより生息環境を保全することができる。

大石 敏 ヒナモロコ里親会

行政への働きかけが重要である。ヒナモロコは田園の片隅で忘れ去られていたが、保護の重要性を訴え、検討委員会を設置し、保護を目的とした水路の設置が可能になった。



白熱した総合討論

三塚 牧夫 ナマズのがっこう

中荅 元一 メダカ里親の会

水田魚道の設置によりドジョウなどの魚類が著しく増加した。地元への説得が最も重要である。

(3) 会場やパネラーからの意見

- ・地域を見つめなおす調査として田んぼの生きもの調査が全国350箇所が進められ、農業者が田園の自然に関心を持つようになった。
- ・活動を継続するためには、生産物に付加価値を付けることが重要。
- ・自然再生活動を展開するためには地域のコーディネーターが不可欠である。
- ・あまりにも米価が下がって、農業をつづけるために必要なモチベーションが低下している。田園自然再生の担い手である農業者の経済的基盤を保証する必要がある。
- ・活動には地域の理解と学会など科学技術のバックアップが重要である。

(4) 今後の課題 自由討論

農業者は草刈り、浚渫、ため池の保全などほとんど無料で実施している。保全活動の経費について米価に上乗せして国民が支払うなどの方策が必要と考える。

シナイモツゴ郷の米は付加価値の向上のみをねらっているのではない。自然再生活動の必要性と重要性を消費者に理解してもらい、その経費を負担してもらおうというのが認証制度である。単純に自然再生により付加価値を付けてお金儲けをするとすると、国民の理解は得られないだろう。

生態系の遺伝資源は国有財産であることを地域住民に訴えなければならない。だから、復元したものを必ずしも食用にする必要はない。整備事業は土地改良区が中心となって莫大な国税を使って実施している。環境の重要性を広くアピールして国民の発言力で良い方向性を示す必要がある。

初めて取り組んだシナイモツゴ郷の米の生産・販売

かしまだいシナイモツゴ郷の米作り手の会 事務局 菅井 博

シナイモツゴ郷の米とは・・・

絶滅の恐れがある大崎市指定の天然記念物シナイモツゴの保護に努めながら、水環境のバロメーターでもあるシナイモツゴが棲息するため池の水を利用し、まごころ込めてじっくりと、丁寧に栽培した安全・安心な環境保全米【ひとめぼれ】です。

シナイモツゴ郷の米つくり手の会 が発足

昨今の農業を取り巻く状況が厳しさを増している中で、偽装米・事故米など[食の安心・安全]が全国で問われています。今こそ持続性のある農業と地域の環境保全の為に、じっくりと丁寧にお米を作り続けたい！との願いから、6月末に生産・販売を担う かしまだいシナイモツゴ郷の米つくり手の会（吉田千代志会長、会員10人）が発足しました。



かしまだいシナイモツゴ郷の米つくり手の会

いよいよ「郷の米」の収穫

今年は、長雨や天候不順が続き、初めての取り組みとなる「郷の米」



も影響が心配されましたが、黄金色の稲穂に実り9月末に稲刈りをはじめることができました。生産者は深谷地区2名、広長地区で2名、面積は約3ヘクタールで環境保全米「ひとめぼれ」を栽培しました。この米づくりは新しい試みでもあり、郷の会と連携しJAの協力を得ながら、生産者の理解を得る必要があったため、たくさんの打合せや会議を伴う大変な作業となりました。



シナイモツゴ郷の米

郷の米販売開始!!

新聞社や放送局などのマスコミから多数の取材を受けたこともあり郷の米の予約も順調で10月9日に販売を開始しました。いざ出荷、販売となると精米・計量・袋詰めとラベル貼付・資材調整・発送用伝票の記入など大変な作業になりました。その後 注文も順調で30kg入り袋で約100袋を販売することができました。

今後のシナイモツゴ郷の米は・・・

郷の米の知名度も上がってきて、お客様も増えてきていることから、今年度は5～6町歩（ヘクタール）程度に増やす予定です。まだ始まったばかりの小さな取り組みではありますが、地域の食料は地域がしっかり育て、地域を支える想いを大事にし消費者の理解を得ながら、大きな輪になるよう頑張りますので、今後とも変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。



かしまだいうまいもんセット

シナイモツゴ里親活動に参加しませんか

二宮景喜

3月の声を聞くと、まもなくシナイモツゴの増殖活動の準備に入ります。また忙しい一年の始まりです。

シナイモツゴを保護し、増やすことが本会の原点です。そのために里親制度をつくり、活動をしていることはご存知と思います。昨年度も県内5つの小学校で、子どもたちの手でシナイモツゴを卵から育ててもらっています。一年をかけての成果は5月ごろに稚魚の回収してみてもわかりますが、今回も好い結果がでてほしいものです。しかし、常にうまくいくわけではないのが自然界相手の仕事の難しいところです。

この活動で、子どもたちはシナイモツゴを自分たちの手で孵化させ、世話をしたことで、大いに喜んでくれます。同時に、シナイモツゴを育てることで、希少種だけでなく、生態系全体を守ることが大切なことを理解してくれます。また、残された自然を維持することが今はどれだけ難しくなっているか、またそのための努力がどれだけ必要かということも活動を通じて少しずつわかってきます。小学校での里親活動が、ただシナイモツゴを増殖するだけではない、重要な活動であることをお分

かりいただけたらと思います。

学校の里親活動を支えるための裏方の仕事

は、楽しみもありますが、苦勞もあります。まず、5月の卵の採取の準備。産卵ポットを準備し、繁殖池にひもで結んで浮かべます。これには数日かかります。受け入れる学校の池の状況もさまざまですので、清掃や補修を学校側と協力して行い、そのあと水をはり、餌となるミジンコをわかせておきます。時期が来れば、産卵の状況を観察して、ベストのタイミングをはかりながら、学校の池へ卵を運びます。学校では子どもたちとの共同作業ですので、学校との日程の調整が必要です。休



大崎市立鹿島台小学校

みの日や学校行事がある日は使えません。最盛期には連日、繁殖池と学校との間を往復することもあります。このような作業を、限られた数の会員でやっております。

このような状況ですので、人手

が必要で、新たに協力、参加していただける方、特に土日以外の日に活動できる方を探しています。現在は鹿島台、小牛田、小野（東松島）、鶴谷、松陵（仙台）の5校でやっていますので、それぞれの学校に近い方で、地元の学校を専門にお手伝いいただく方も大歓迎です。是非ご連絡ください。

今年には以上のような状況で、卵から育てる学校の里親をこれ以上増やすことは躊躇していますが、新たに希望する小学校があり、そこを専門的にサポートしてくれる方がいれば、若干増やすことは可能かと思えます。

昨年、シナイモツゴ郷の米の認証制度が発足しました。それにあわせて、シナイモツゴの生息池をさらに拡大していくことは必要と考えています。シナイモツゴを放流するのに適したため池を管理している人（あるいは団体）に里親となっていただけるようにさらに努力をし、子供たちが育てたシナイモツゴの放流場所にしていきたいと考えています。

シナイモツゴを水槽で飼っていただけるように、個人あるいは公共機関を対象にした里親制度もありますので、関心がおありでしたら、手紙あるいはEメールで本会までご連絡ください。但し、個人の場合は本会の賛助会員になっていただくことが条件になります。また、いずれの里親の場合も、宮城県内のみに限らせていただきます。これは、他の地域のシナイモツゴとDNAレベルでの交雑を防ぐためです。

今年もまた里親活動にご協力をお願いいたします。



東松島市立小野小学校

「コウノトリの郷米」の豊岡市を招き **フォーラム開催**

スクラム組む大崎3つの自然再生米

連携約束、鎌田記念ホールに 100 名参加

豊かな田園を守る自然再生米作りフォーラムが初めて大崎市鹿島台鎌田記念ホールで2008年10月11日に開催されました。大崎市で自然再生米づくりに取り組んでいる3団体「かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会」、NHKテレビドラマ「おこめのなみだ」で一躍有名になった「鳴子の米プロジェクト」、冬季湛水田と取り組む「ふゆみずたんぼ米生産組合事務局」、さらに先駆的モデルの豊岡市コウノトリ共生課を招き、情報交換と意見交換を行いました。総合討論では技術的な情報交換と合わせて、活動を継続するために相互協力することで一致、ふゆみずたんぼ米の西沢氏からは3つの自然再生米をセットで販売しようとの提案があり、会場が盛り上がりました。市内外からフォーラムに参加した100名は、討論後の試食会でもシナイモツゴ郷の米、品井沼ヒシ、田尻の宮城野ポークのスープなどに舌鼓を打ちながら、今後の展開を明るく語りながら再会を約束した。フォーラムの開催に際しましては、共催の大崎市と後援の日野自動車グリーンファンドとJAみどり、試食会では大崎市食生活改善推進協議会鹿島台会から多大なご支援をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。



開催挨拶をする二宮理事



大崎市の特産品展示即売コーナー



シナイモツゴ郷の米の試食会



東北181号の名称が
「ゆきむすび」
に決定しました



定着しつつある生き物調査と池干し

坂本 啓

農林水産省の農村景観・自然環境保全再生パイロット事業の助成を受け始めてから今年で3年目になります。この事業はボランティア活動をした人数と時間から労働費を算出し、その額に基づいた助成を受けられるというボランティア活動にはピッタリの助成金です。今年もこの助成を受けて、たくさんの活動を行いました。以下にいくつか紹介したいと思います。

深谷地区生き物調査（平成20年7月20日）

地区の子供たちと昔の子供たちがたくさん参加し、賑やかな生き物調査となりました。メダカ、モツゴ、オイカワ、カネヒラ、アメリカザリガニ、ヌカエビ、オタマジャクシ、ドブガイなどが確認されました。郷の会のインストラクターが在来魚の保全に関する解説を行いました。



山谷地区生き物調査（平成20年8月3日）

山谷地区では圃場整備が行われ、その後初めての魚類調査となりました。今後魚の種類や数がどのように変わっていくか、注意深く見ていく必要があります。フナ、モツゴ、ドジョウ、シナイモツゴ、オイカワ、タモロコ、アメリカザリガニ、スジエビ、オタマジャクシなどが確認されました。

広長地区Aため池池干し（平成20年9月7日）

昨年シナイモツゴを放流したため池で魚類調査を行いました。ブラックバスなどの外来魚は確認されず、また5月にはシナイモツゴの産卵も確認され、会員並びに地元の皆さんもホッと安心していました。ヘラブナ、ギンプナ、ジュズカケハゼ、シナイモツゴ、オタマジャクシ、ドブガイなどが確認されました。



山谷地区Iため池池干し

（平成20年11月16日）

毎年の池干しが恒例となりつつあるため池で、今年も池干しが行われました。数年前にはブラックバスが確認されていましたが、最近では全く確認されていません。このようなため池がどんどん増えるといいですね。コイ、フナ類、モツゴ、ジュズカケハゼ、ドジョウ、タモロコ、ヨシノボリ、ヌカエビ、アメリカザリガニ、オタマジャクシなどが確認されました。

フェロモンを用いたオオクチバスの駆除

藤本泰文 (財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団

「フェロモン」と言うと、色っぽいお姉さんの周りから流れてきそうな、甘い香りのようなイメージでしょうか。ついつい誘惑されてしまうのは、悲しい男の性ですね...。そんな「誘惑される」「引き寄せられる」性質を利用して、オオクチバスの駆除に役立てようという取り組みをしています。

私たちのイメージとは逆に、オオクチバスの場合にはオスがフェロモンを出しているようです。これは、彼らの繁殖生態と深い関わりがあります。オオクチバスは、オスが巣をつくり、やって来たメスは相手や巣を気に入ればそこで産卵します。ところが、オオクチバスの住む場所は、溜め池や伊豆沼のように数十 cm 先も見えないほど濁っていることもあります。濁った水の場所で、メスに自分の巣のある場所まで来て貰うにはどうすればいいでしょうか。そんな時、フェロモンが役立ちます。例えば水が濁っていても、相手にも分かる匂いを流せば、自分がいる巣の場所を見つけて貰えるからです。

昨年(2008年)に行なった実験で、オオクチバスのオスの胆汁が、産卵前のメスが引き寄せるのを確認しました。この中にメスを引き寄せるフェロモンが入っているようです。胆汁は通常、腸内での消化に使われていますが、体外に放出することで、フェロモンとして使う魚種がいることが報告されています。今回の結果から、オオクチバスでも、オスが胆汁を何らかの形で体外に放出してメスを引き寄せていると考えています。

現在、この胆汁を使って、オオクチバスのメスを駆除する手法を開発しています。胆汁を容器に入れて少しずつ流し、そこに刺網を置いて、引き寄せられたメスを捕獲する方法です。私たちはこれまで、卵は人工産卵床、稚魚は三角網、未成魚は定置網、オス親魚は小型刺網と、あの手この手でオオクチバスに対処してきました。しかしオオクチバスのメスを狙って駆除する手法はありませんでした。開発中のフェロモン



による駆除手法は、「最後の砦」であるメス親魚に対処する有効な手法になるでしょう。

子孫を残そうと頑張るオオクチバスの仕組みを逆手に取ったこの駆除手法。オオクチバスの駆除活動を何年も続けてきた背景があって、開発に着手することができました。みなさまのご協力に感謝しています。より効率的な駆除手法の開発とともに、日々の地道な駆除活動の継続を続けて、少しでも早く、明るい話題をみなさんにお届けできればと思っています。

(本研究はシナイモツゴ郷の会が日本経団連自然保護基金の助成を受け、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団と共同実施しています。)



文化祭雑感

鈴木康文

今年も恒例の第3回大崎市鹿島台文化祭が11月1～2日に鎌田記念ホールで開催されました。市民文化祭はシナイモツゴ郷の会にとって重要な行事で我々の日頃の活動の発表の場であり、また、大切な啓発宣伝事業でもあるのです。このために毎月の定例会や準備会で展示物や展示方法について細かな打ち合わせを重ねてきました。

準備の中で一番苦労するのが生きた魚や貝類の採取です。文化祭前日に鹿島台地域の川や水路で童心に帰りにぎやかに元気な生き物を探すのです。水槽には脱塩素した水、石、水草を入れて通気すると準備完了、魚を収容できます。苦労の甲斐あって、水槽展示はいつも人気があり、老若男女の注目の的です。

会場では例年通り、生きものコーナー、資料コーナー、ビデオコーナー、体験コーナー、ヒシの試食コーナーを設けることになりました。生きものコーナーでは、シナイモツゴを始め、フナ、ジュズカケハゼ、ウグイ、オイカワ、ドジョウ、タイリクバラタナゴなど10種類の魚とアメリカザリガニやドブガイなど貝類を大小10個の水槽に入れ、展示しました。

資料コーナーでは、展示パネルを使ってシナイモツゴ郷の会や卵から育てる里親校の活動を始めとして、池干し、品井沼ヒシ、シナイモツゴ郷の米などについて豊富な写真で紹介しました。また、体験コーナーではヒシプロジェクトによる品井沼ヒシの展示と試食を行いました。

開催2日間を通して、大勢の方が郷の会のブースを訪れ、会員インストラクターの説明を聞きながら熱心に見学しました。一番の人気者はやはりシナイモツゴです。「ずいぶん小さな魚だなあ～」、「何年生きるのか?」、「どのくらい大きくなるの?」、「おす、めすの違いは?」などの質問が次々に飛び出します。子供たちに人気があるのはザリガニで、家で飼いたいと何人もが欲しがると驚かされました。ヒシコーナーでは中高年の方々が「昔、食べたよなあ～」、「懐かしいなあ～」と大喜びで、「どうやって皮をむくの?」と聞く人や「来年も採れたら是非また食べさせて」と言って帰って行く人もいました。

毎年、我がシナイモツゴ郷の会のコーナーが大盛況で館内展示中、最も好評で人だかりが絶えません。生きものは誰でも興味があるのだなあ、やはり、我々のやっていることは非常に大事なことなんだなあと実感しました。次回の文化祭も趣向を凝らした企画を考えますので、ご来場を心よりお待ちしております。



お忙しい中、ご来場下さいました伊東市長はじめ多くの方々に感謝申し上げます。

郷の会に参加して

久保田 龍二

昨年から参加させてもらっています新米会員の久保田と申します。私は東京生まれの東京育ちですが、東京といっても私の幼少の頃は、近所に藁葺屋根の農家もあり、家の前は畑でその向こうに雑木林の斜面があり、それを降りると田んぼや小川がある典型的な田園地帯でした。子供の頃の遊びというもっばら田んぼや小川で生き物を捕まえて来ては家で飼っていました。

しかし私の幼少期は昭和 40 年代であり高度経済成長期、農薬全盛期で小川には魚はおらず、もっばらアメリカザリガニが興味の対象でした。私は現在、生き物好きの延長線上で生物に関わる仕事をしていますが、そのきっかけとなったのがアメリカザリガニとは何とも言い難いものがあります。

学生時代には縁あって岩手県の三陸町（現大船渡市）という小さな漁村で、大学生活をおくっていたこともあり、地元東京にはない東北の雄大な自然が好きになり、東京で 14 年仕事をした後、会社の東北出店にあわせて手をあげて仙台にきました。

自然の中でも、海、川、池、沼などの水のあるところが好きで、仕事でも松島湾に潜ったりしていますが、個人的にも何か活動がしたいと思いつつシナイモツゴ郷の会に入れてもらいました（前置きが長くなりました・・・）。

さて郷の会では、ヒシの種まき、バス・バスターズ、移動研修会、里親などの活動に参加させて頂き、田園風景の中に身を置いていると何故か心地よく癒されていく自分があることを実感しました（バス駆除で心が癒される自分に疑問を感じるころでもありますが・・・）。

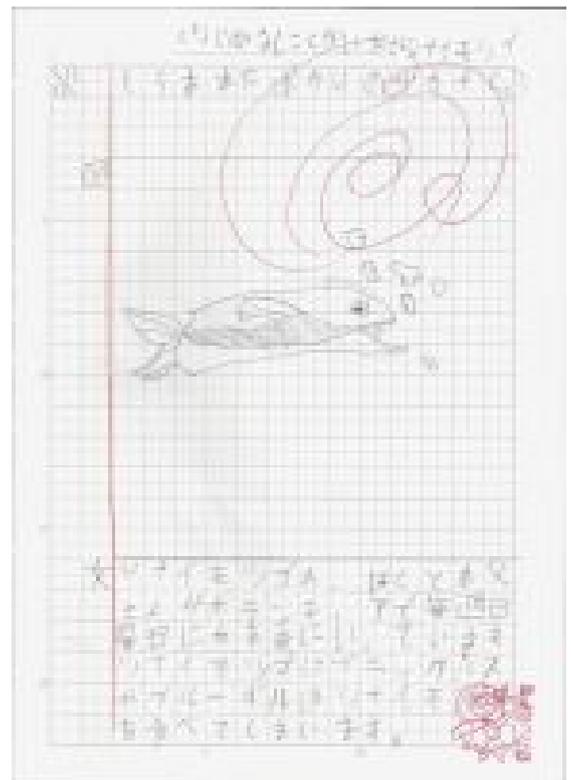
また、小4の息子も何度か参加しましたが、学校の自主勉ノートに品井沼にいる生き物というテーマでシナイモツゴ、メダカ、タニシ、ブラックバス、ヒシなど絵と解説文を書いており、子供ながらに何かを感じてもらえて嬉しく思いました。

私の住んでいる七ヶ浜町にも田んぼ、池、海など自然が豊富ですが、あまり普段子供たちはこういった場所では遊びません。「なんで遊ばないの？」と聞くと「学校で行ってはだめ」と言われるそうです。安全を考えると仕方がないのかもしれませんが、このような自然体験の中から楽しさと同時に危険や痛さなど覚えていくことが必要ではないかと思います。

近年、環境教育というものが盛んに行われており、大人の管理下で安全に自然を体験するという方法のようですが、否定はしませんがこのようにしなければ子供たちが自然を体験できないという世の中に疑問を感じないでもありません。

私の実家はまだ東京にあります。藁葺屋根の農家はマンションに、小川は三面張水路に、田んぼは住宅地になり、斜面の雑木林だけが放置されて残っている状況です。私の原風景はすでにそこにはなく、なおさら品井沼や伊豆沼周辺の田園風景に心惹かれて足を赴くことになるでしょう。

今後とも息子ともども宜しくお願いいたします。



息子の自主勉ノート

シナイモツゴBCC通信から (No136: 11月26日配信)

みなさま

寒い、寒いと言っていたら、来週から師走、今度は慌ただしくなりそうです。

イベント情報

1 シンポジウム「魚類復元による田園自然再生」

当会主催で水田の自然再生について議論し、成果を全国へ発信します。

日時：2008年11月29日(土) 13:30~

会場：立教大学池袋キャンパス

間近にせまってきました。参加される方、よろしくお願ひします。

成果情報

1 河北新報連載

11月15日から4日連続で郷の会の特集記事が掲載されました。

実績を広く認めていただき、感謝・感激しました。

PDF ファイルを添付します。(この通信はHPに掲載するため、記事を添付できません。)

2 山谷地区池干し

11月16日(日)に鹿島台山谷池袋ため池で実施しました。

昨年も池干ししており、今年は、大量のモツゴとジュズカケハゼ、スジエビが漁獲されました。

「バスがいなくてこんなに魚が増えるんだなあ」と参加者の感想でした。

3 シナイモツゴ郷の米

好評発売中

受付は11月末日までだそうです。

豊かな自然を守る農業者を支援するため、安全

シナイモツゴBCC通信

会員の情報共有を図るため、毎月2~3回メール配信しています。配信を希望される方は事務局へメールでお知らせください。BCC通信ではシナイ通信をカラーで見ることができます。

安心、超美味の「シナイモツゴ郷の米」を購入しましょう。

個性的な袋入り2kg 900円です。

問い合わせ・注文先：かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会事務局(菅井0229-56-5748)

シナイモツゴ郷の会の企画編集 第2弾!

田園の魚をとりもどせ 高橋清孝編著、恒星社厚生閣

(2009年1月30日発刊、大好評、2月20日増刷)

魚たちのゆりかご田園地帯の自然は開発や外来生物の侵入により崩壊の危機
現状、自然再生のノウハウ、再生モデル、調査方法を豊富な図と写真で詳述
全国で取り組まれている先進的な自然再生活動を紹介

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。